

守山企業景況調査報告書

(第26回)

平成28年1月～平成28年3月期 実績

平成28年4月～平成28年6月期 見通し

守山企業景況調査について

(平成 28 年 1 月～平成 28 年 3 月期)

1. 調査方法

守山商工会議所会員企業 71 社に対し調査票を配布し、回答を依頼した。記入済み調査票は商工会議所へ持参、郵送、Fax 等により回収した。

2. 調査企業

産業別	調査対象企業数	有効回答企業数	回収率
小売業	20	15	75.0%
製造業	13	13	100.0%
建設業	12	12	100.0%
サービス業	20	17	85.0%
卸売業	6	5	83.3%
合計	71	62	87.3%

3. 調査期間

調査期間は、実績を平成 28 年 1 月～平成 28 年 3 月、見通しを平成 28 年 4 月～平成 28 年 6 月とし、調査時点は平成 28 年 4 月 30 日とした。

4. 調査データについて

調査の結果を示す指標として DI 指数を採用した。DI 指数とは DIffusion Index (景気動向指数) の略で、各調査項目について、「増加」・「好転」したなどとする企業割合から「減少」・「悪化」したなどとする企業割合を差引いた数値である。

「業況」、「売上」、「採算(経常利益)」、「従業員」の DI 指数は前年同期との比較である。

「資金繰り」、「資金の借入れ難易度」の DI 指数は 3 カ月前との比較である。

「取引の問い合わせ」、「採算(経常利益)の水準」の DI 指数は過去との比較ではなく、調査時点での水準を聞いたものである。

調査の概要

平成 28 年 1 月～3 月期の守山企業景況調査の結果は、以下の通りである。調査結果は DI 指数（景気動向指数）を用いて示している。

DI は、「増加」「好転」等の企業割合から「減少」「悪化」等の企業割合を差引いた数値である。そのため、DI が±0 の状態であれば、「増加」「好転」等の企業割合と「減少」「悪化」等の企業割合が同じであることを示し、プラスの数値であれば「増加」「好転」等の企業割合が「減少」「悪化」等の企業割合よりも多いことを示す。逆に DI がマイナスの数値であれば、「増加」「好転」等の企業割合が「減少」「悪化」等の企業割合よりも少ないことになる。

また、グラフは右肩上がりになれば良い方向に向っていると判断でき、右肩下がりになれば良くない方向に進んでいると考えられる。

平成 28 年 1 月～3 月期の調査結果では、売上高、業況、採算の主要 3 指標で前回調査より数値が上昇した。

<業況>

業況 DI は▲11.9 で前回調査の▲14.3 から 2.4 ポイント上昇した。業種別では、小売業▲14.3（前回調査比▲14.3）、製造業▲30.8（前回調査比▲39.1）、建設業 16.7（前回調査比+16.7）、サービス業▲13.3（前回調査比+33.8）、卸売業▲20.0（前回調査比+20.0）と建設業、サービス業、卸売業が上昇した。

4 月～6 月期見通しは全体で▲25.9 であり、見通しは明るくない。

<売上高>

売上高 DI は▲6.5 で前回調査より 18.9 ポイント上昇した。業種別では、小売業▲6.7（前回調査比+21.1）、製造業▲7.7（前回調査比▲16.0）、建設業▲8.3（前回調査比+0.8）、サービス業▲11.8（前回調査比+35.3）、卸売業 20.0（前回調査比+80.0）であり、製造業の低下とそれ以外の業種の上昇という構図になった。

4 月～6 月期見通しは全体で▲14.5 となっており、減少の見込みである。

<採算（経常利益）>

採算（経常利益）DI は▲15.3 で前回調査より 6.4 ポイント上昇した。業種別では、小売業▲13.3（前回調査比+8.9）、製造業▲30.8（前回調査比▲12.6）、建設業 0.0（前回調査比+20.0）、サービス業▲6.7（前回調査比+18.3）、卸売業▲40.0（前回調査比▲20.0）で製造業と卸売業が減少している。

4 月～6 月期見通しは全体で▲25.9 であり、今回調査実績から低下している。

<資金繰り>

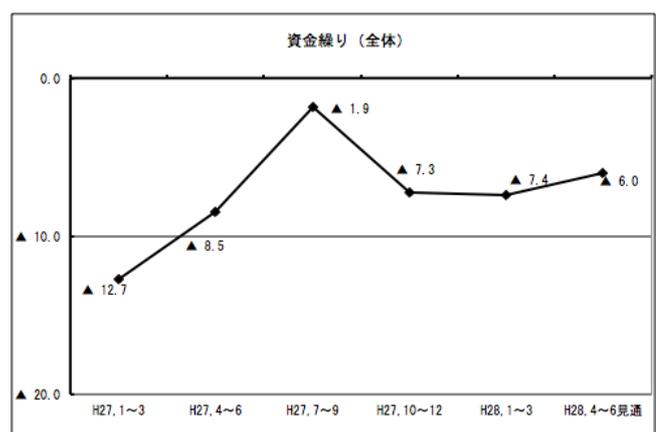
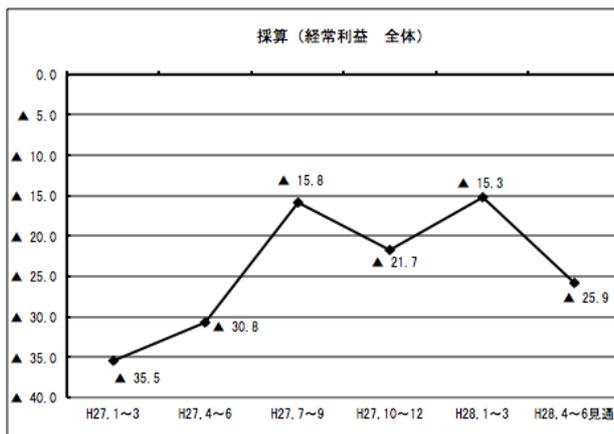
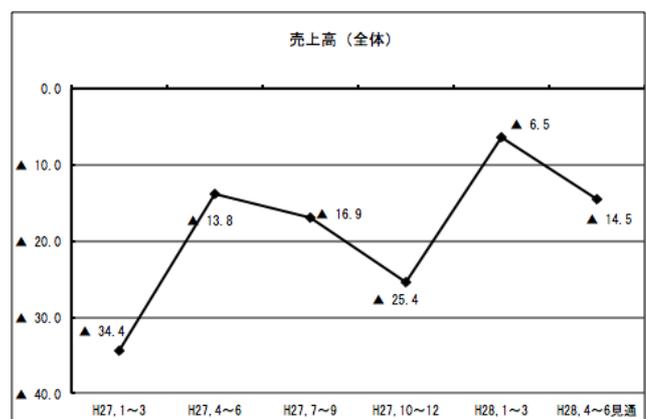
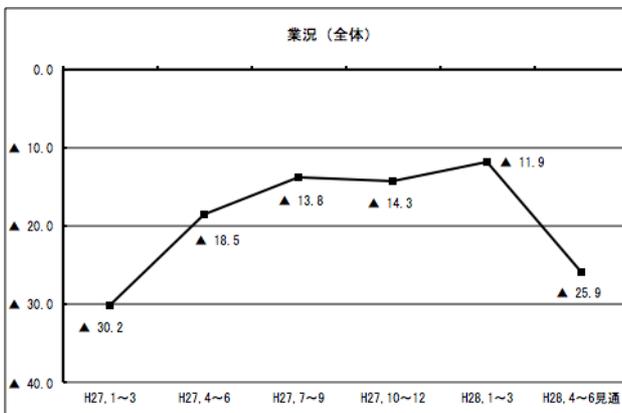
資金繰り DI は▲7.4 で前回調査より 0.1 ポイント低下した。業種別では小売業▲13.3（前回調査比▲0.8）、製造業▲11.1（前回調査比▲11.1）、建設業▲8.3（前回調査比+11.7）、サービス業 0.0（前回調査比±0.0）、卸売業 0.0（前回調査比±0.0）であった。

4 月～6 月期見通しは全体で▲6.0 であり、今回調査実績より 1.4 ポイントの上昇となっている。

<その他の意見>

若い年代の人に高齢者が蓄積した富が分配され、子や孫の世代の所得が増え消費経済を支える社会が望ましいと考える。

消費者の消費行動の変化などで、大型店に負けないよう販売価格をギリギリまで引き下げるような努力をしてもその努力を見てもらえるチャンスが少ない。



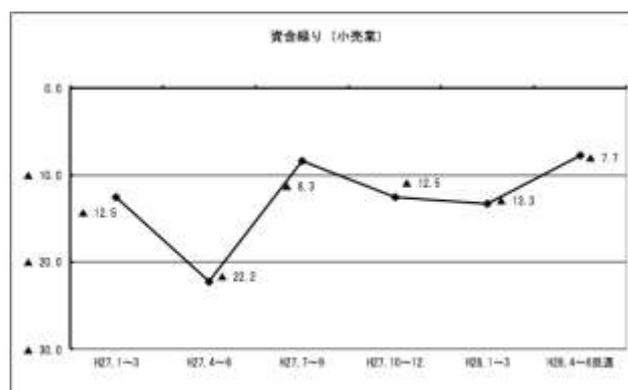
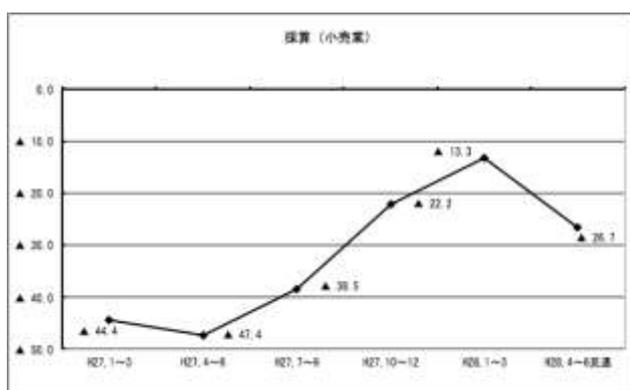
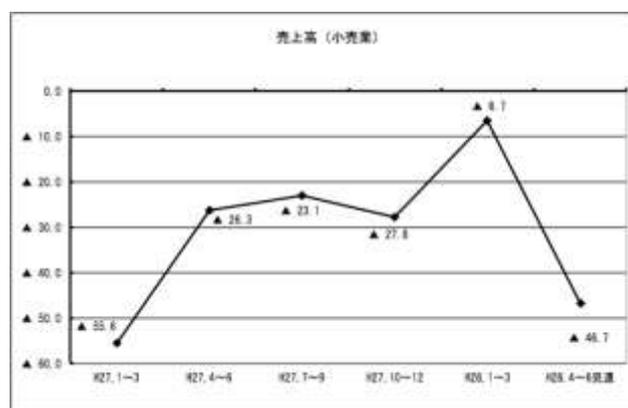
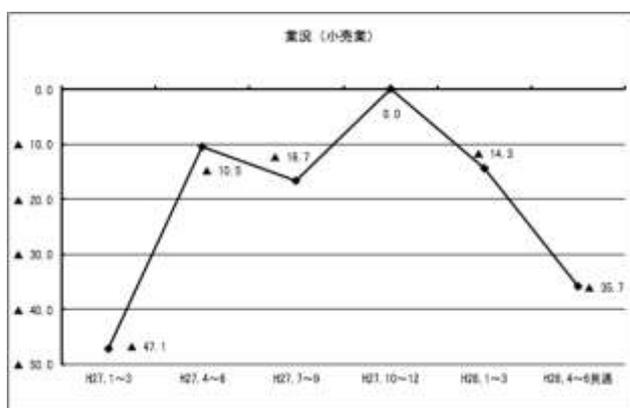
小売業

小売業の業況DIは▲14.3で前回調査より14.3ポイント低下した。前回調査で0.0まで回復したのであるが、再びマイナスの数値となった。調査結果を見ると業況を良いとする回答があるものの、悪いとする回答の方が多かったことによるものである。4月～6月期見通しではさらに数値が低下し、▲35.7となっている。

売上高DIは▲6.7で前回調査より21.1ポイント上昇した。数値自体はマイナスであるが、過去1年になく高い結果である。ただし、4月～6月期見通しが▲46.7と大幅に低下しており年始から年度末にかけての一過性の売上高増加現象と考えられているようである。

採算DIは▲13.3で前回調査より8.9ポイント上昇した。採算は平成27年4月～6月を底に順調に回復してきていると言える。しかし、4月～6月期見通しは▲26.7となっており事業者は警戒しているようである。

資金繰りDIは▲13.3で前回調査より0.8ポイント低下した。小幅ながら2四半期連続で低下している。一方で4月～6月期見通しは▲7.7と上昇しており資金繰りには明るい見通しとなっている。



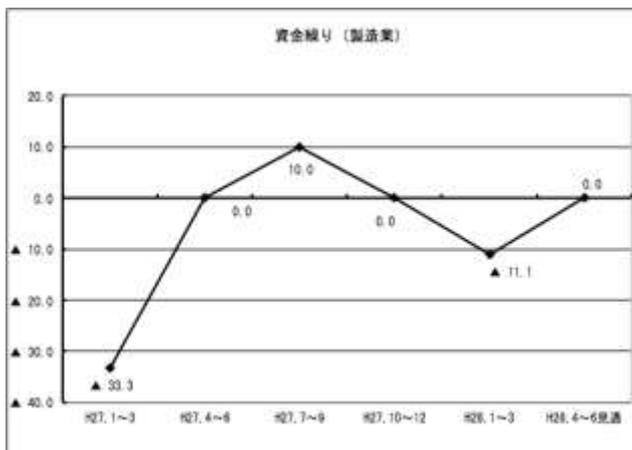
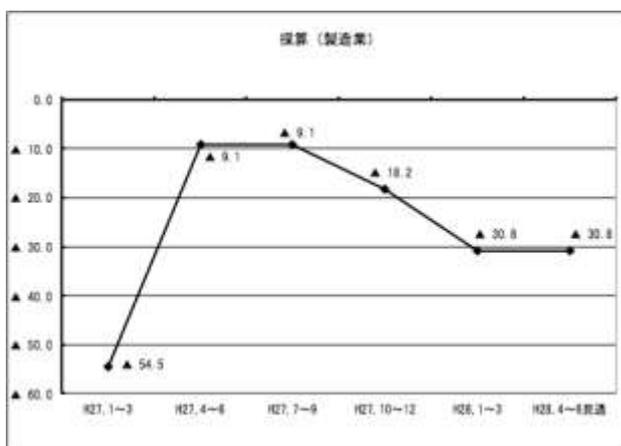
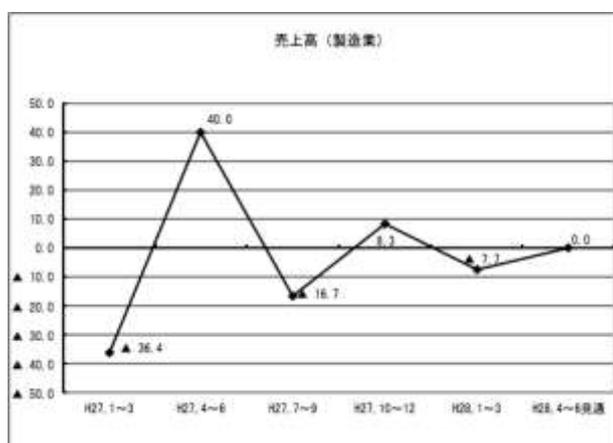
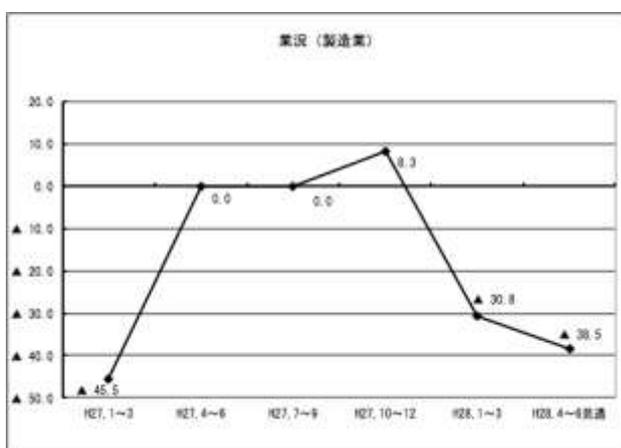
製造業

製造業の業況 DI は▲30.8 と前回調査に比べて 39.1 ポイント低下した。1 年前の調査でも 1 月～3 月期は大幅に DI が低下しているところを見ると季節的な要因が大きく関わっているようであるが、業況の 4 月～6 月期見通しが▲38.5 とさらに低下しており、かなり弱気な見通しになっている。

売上高 DI は▲7.7 で前回調査より 16.0 ポイント低下した。業況と同じように季節的要因が関係していると考えられ、4 月～6 月期は±0.0 の見通しとなっている。

採算 DI は▲30.8 で前回調査より 12.6 ポイント低下した。これも季節的要因が関係していると思われるが、4 月～6 月期見通しも▲30.8 で採算は季節的要因だけでは説明がつかない低下であるかもしれない。

資金繰り DI は▲11.1 で前回調査より 11.1 ポイント低下した。業況、売上高、採算の低下に連動した形になっている。ただ、資金繰りの 4 月～6 月期見通しは±0.0 に戻っているため、一時的な落ち込みであると考えられる。



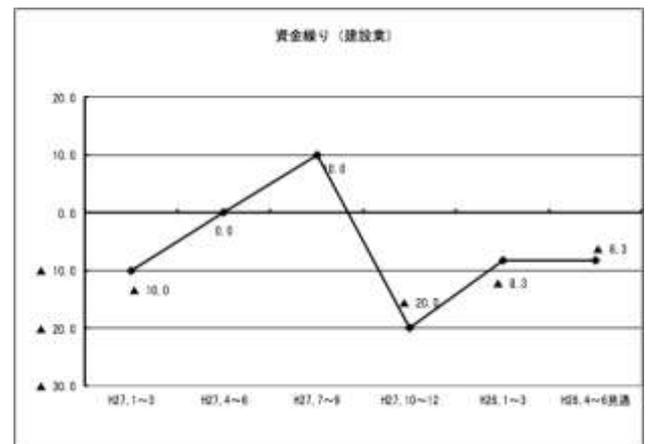
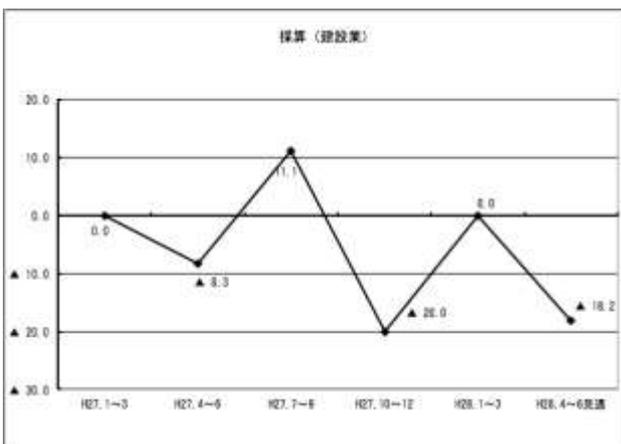
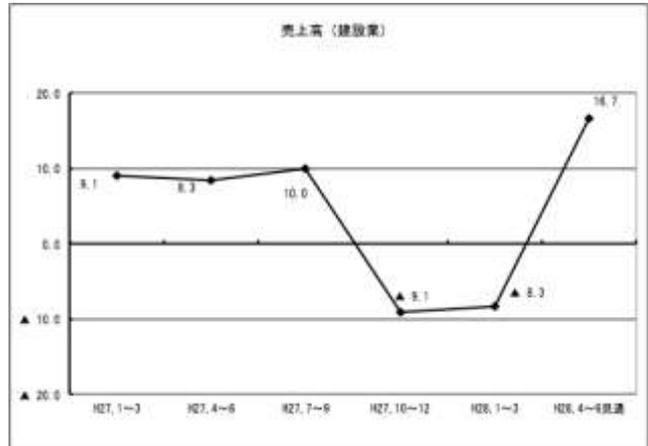
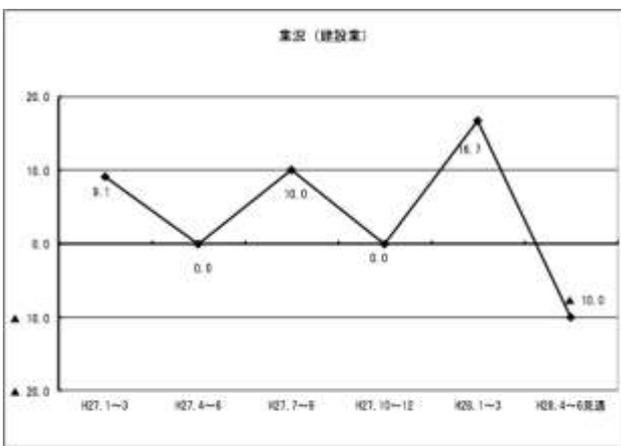
建設業

建設業の業況DIは16.7であり前回調査より16.7ポイント上昇した。建設業の業況DIは四半期毎に上下を繰り返すような動きをしており、今回調査期間は、上昇のタイミングであることが予想され、その通りとなった。4月～6月期見通しは低下の順で、調査結果も▲10.0と低下になっている。

売上高DIは▲8.3で前回調査より0.8ポイント上昇したものの2四半期連続でマイナスとなった。しかし、4月～6月期の見通しが16.7とプラスに回復していることから見通しは暗くないと考えられる。

採算DIは±0.0で前回調査より20.0ポイント上昇した。採算のDIは業況のDIと同じような動きをしていることから今回調査期間は上昇のタイミングである。4月～6月期見通しは▲18.2であるのでこれも同様である。

資金繰りDIは▲8.3で前回調査より11.7ポイント上昇した。前回調査の▲20.0が最近にない低い数値であったのでそこからは回復していると考えられる。4月～6月期見通しも▲8.3でマイナスの数値であるが安定している。



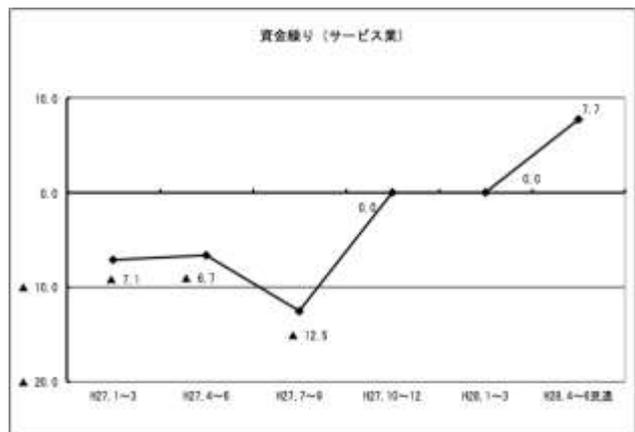
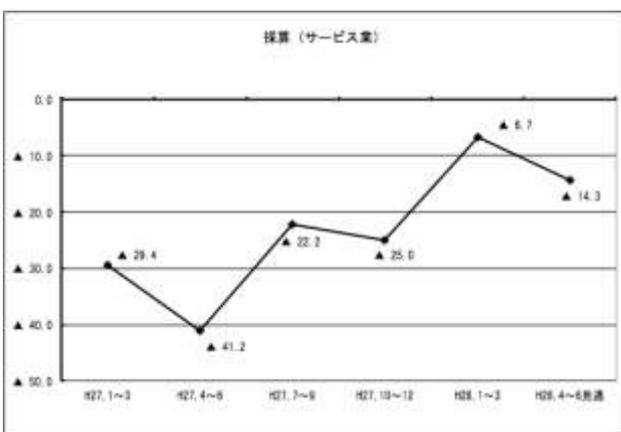
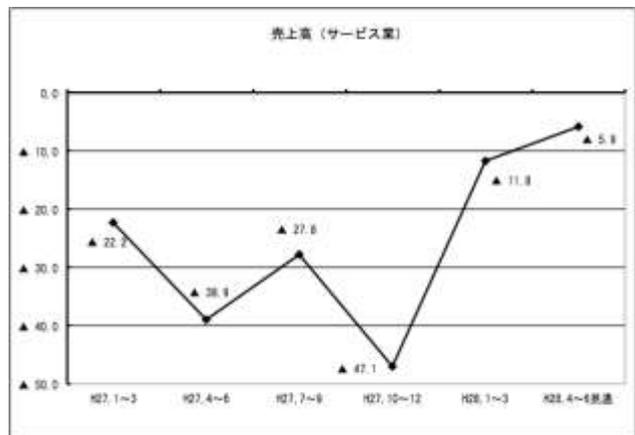
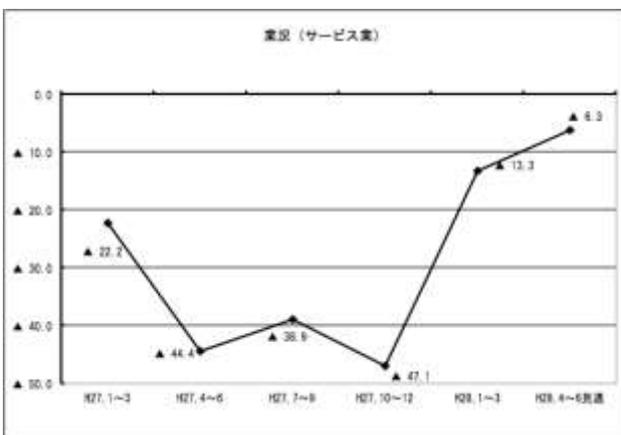
サービス業

サービス業の業況DIは▲13.3で前回調査より33.8ポイント上昇した。前回調査まではマイナス40近辺を上下していた業況DIが大きく動いた。今回調査期間から業況の回復が始まったように見える。4月～6月期も▲6.3と今回の実績より高い数値であり、回復が期待されている。

売上高DIは▲11.8で前回調査より35.3ポイント上昇した。業況と同様に今回調査期間から回復が始まったように見える。4月～6月期見通しも▲5.9で回復基調に乗ることが予想されている。

採算DIは▲6.7で前回調査より18.3ポイント上昇した。この指標でも今回調査期間での回復が見て取れる。しかし、4月～6月期見通しは▲14.3で下がっており、採算は一気に回復基調とは見られていないようである。

資金繰りDIは±0.0で前回調査と同じであった。資金繰りは前回調査時点で±0.0になっており、業況、売上高、採算に先立って回復しているようである。4月～6月期見通しは7.7とプラスの数値になっており、かなり明るい兆しが見える。



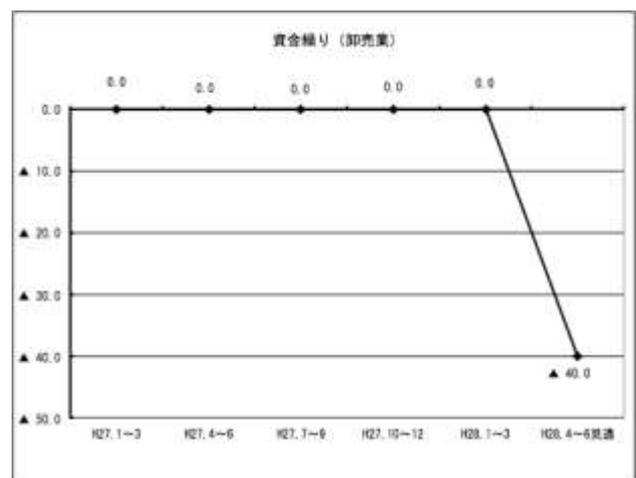
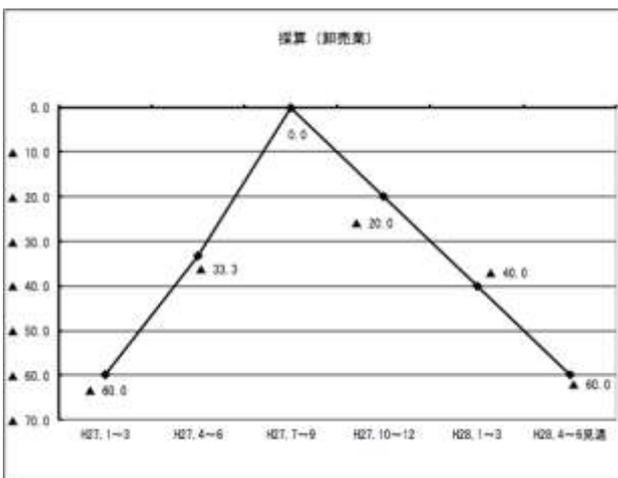
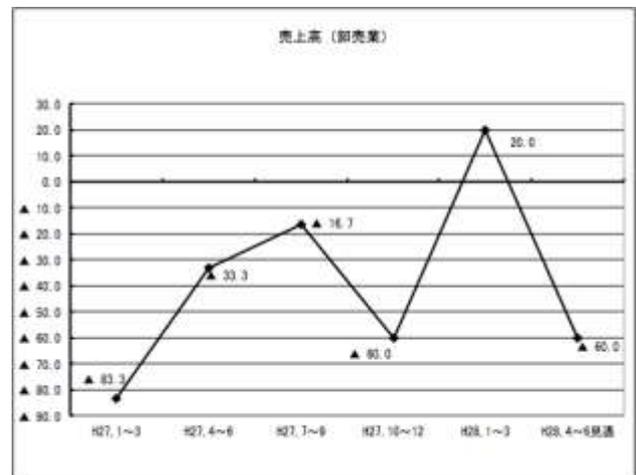
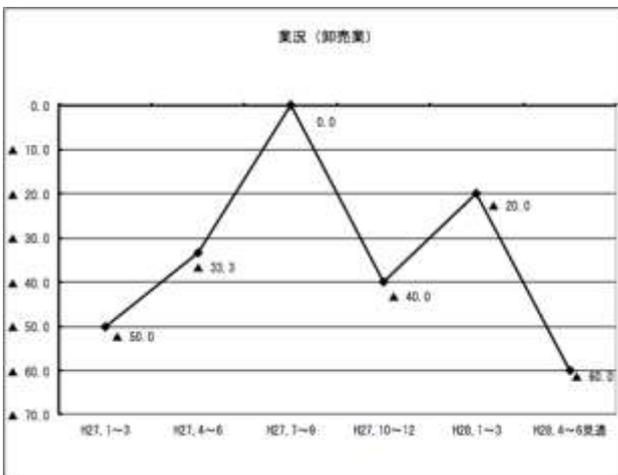
卸売業

卸売業の業況DIは▲20.0となり前回調査に比べて20.0ポイントの上昇である。変動の激しさはサンプル数の少なさゆえ仕方がないことであるが、数値が上昇したことは明らかなことである。しかし、4月～6月期見通しは▲60.0と低下を見込んでおり全体としてみれば明るい状態とは言えそうにない。

売上高DIは20.0で前回調査より80.0ポイント上昇した。1年以上プラスの数値になっていなかった中でのプラスの数値であり、今回調査期間の売上高は良かったようである。4月～6月期見通しは▲60.0なので、今回調査期間とは逆に売上高は苦戦を強いられる予想である。

採算DIは▲40.0で前回調査に比べて20.0ポイント低下した。4月～6月期見通しは▲60.0なので、採算は悪化しているようである。

DI資金繰りDIは±0.0で前回調査と同じである。ここ1年は0.0が続いており資金繰りは安定しているようであったが、4月～6月期見通しは▲40.0となっており安定が崩れることも考えられる。



DI 指数一覧表

	昨年の同期との比較					
	業況		売上高		採算（経常利益）	
	1月～3月 期動向	4～6月期 見通し	1月～3月期 動向	4～6月期 見通し	1月～3月期 動向	4～6月期 見通し
全 体	▲ 11.9	▲ 25.9	▲ 6.5	▲ 14.5	▲ 15.3	▲ 25.9
小売業	▲ 14.3	▲ 35.7	▲ 6.7	▲ 46.7	▲ 13.3	▲ 26.7
製造業	▲ 30.8	▲ 38.5	▲ 7.7	0.0	▲ 30.8	▲ 30.8
建設業	16.7	▲ 10.0	▲ 8.3	16.7	0.0	▲ 18.2
サービス業	▲ 13.3	▲ 6.3	▲ 11.8	▲ 5.9	▲ 6.7	▲ 14.3
卸売業	▲ 20.0	▲ 60.0	20.0	▲ 60.0	▲ 40.0	▲ 60.0

	該当期について				昨年の同期との比較	
	採算（経常利益）水準		取引の問い合わせ		従業員	
	1月～3月 期動向	4～6月期 見通し	1月～3月期 動向	4～6月期 見通し	1月～3月期 動向	4～6月期 見通し
全 体	18.0	11.7	▲ 10.3	▲ 15.3	3.6	▲ 1.8
小売業	6.7	0.0	▲ 25.0	▲ 33.3	0.0	10.0
製造業	46.2	23.1	0.0	0.0	15.4	▲ 7.7
建設業	25.0	8.3	▲ 8.3	▲ 8.3	8.3	8.3
サービス業	▲ 6.3	13.3	▲ 18.8	▲ 12.5	▲ 12.5	▲ 13.3
卸売業	40.0	20.0	20.0	▲ 20.0	20.0	0.0

	3カ月前との比較					
	資金繰り		長期借入れ難易度		短期借入れ難易度	
	1月～3月 期動向	4～6月期 見通し	1月～3月期 動向	4～6月期 見通し	1月～3月期 動向	4～6月期 見通し
全 体	▲ 7.4	▲ 6.0	▲ 2.2	▲ 4.4	2.2	▲ 2.3
小売業	▲ 13.3	▲ 7.7	11.1	11.1	0.0	0.0
製造業	▲ 11.1	0.0	10.0	10.0	10.0	10.0
建設業	▲ 8.3	▲ 8.3	▲ 9.1	▲ 9.1	0.0	▲ 9.1
サービス業	0.0	7.7	▲ 16.7	▲ 18.2	0.0	0.0
卸売業	0.0	▲ 40.0	0.0	▲ 25.0	0.0	25.0

過去からの動向

